

M. ヴェーバーの「プロテスタンティズム の倫理と資本主義の精神」(十)

笠 原 俊 彦

Abstract

The sects developed from the Baptist movement, or briefly Baptist Sects, are regarded by Weber as primary and positive in the doctrine as compared to Calvinism, while Pietism and Methodism are thought secondary and passive to Calvinism both in the doctrines and the ascetic ethics.

One of the decisive characteristics of Baptist Sects was just their 'sects' which mean the church originally invisible in heaven concreted visible on earth by the genuine Christians with their voluntary will. And the doctrine of these sects was different from that of old Protestantism and also from that of Catholicism. It was that the blessing could be given only by the manifestation i. e. the work of God's spirit within one's soul; — the Renaissance of the pneumatic theory of early Christianity.

There were two moments distinct in the religious mind of Baptist Sects : (1)Bibliocracy and (2)waiting for the manifestation.

The first generation of Baptist Sects thought that only 'the awakened' were the 'brothers of Christ', because they were made of the spirit of God, and held the Bibliocracy in the meaning of esteem and acquirement of the way of the Apostle's life. This was accompanied with aversion to unavoidable intercourse with worldly life — difference from Calvinism — and with repugnance to any appreciation and worship of creature and so of worldly pleasure — likeness to Calvinism.

However, Baptist Sects had another moment of religious mind strong enough to restrict its Bibliocracy. What had been revealed and described in the Bible was not all but a part of God's words and the words were to be manifested continuously from the past to the present, so that not only the Bible but also the revelation to each conscience of the believers was to be adored.

This idea, which prized the 'subjective' conscience, led to complete the liberation from all the magics and so from the salvation by the church — to the same effect of Calvinism.

Alikeness with Calvinism is also seen in the doctrine that the bless by God, once given, was never lost because this was the work of God and made the men free from all the sins, and, with some slight difference in this turn, that the bless was to be endowed not to all but to some i. e. to the limited number of 'the grown-up'.

As well as in Calvinism, 'good deed' in Baptist Sects was the inevitable sign of one's blessed state; but the deed in the early Baptist Sects was thought to be far from the worldly life and worked passively to the economic occupation.

The ethical life in this sense was supposed to be needed in waiting for the manifestation; it meant the preparation for the revelation because the spirit of God spoke only to the soul soothed and cooled by the ethical deed.

The idea of coolness was accepted in the minds of broad circle when Baptist movement spreaded into the regular lives of the worldly occupations, and then the people with these occupations began to contrall their very wordly lives by their conscience; — a notable change in the religious mind of Baptist Sects, I think.

The membership of the citizens pressed Baptist Sects to proceed now on the soil of worldly asceticism prepared by Calvinism. This was forced also by the Protestant notion that asceticism in monkery was adoration of creature and anti-Bible, and stimulated by the rejection of politics and by the hostility to the aristcratic life style.

Worldly asceticism in Baptist Sects was activated more by the spontaneousness in Baptist Sects which valued the free will of its members

instead of the regulation by the church-police which persecuted people with close examination and oppressed their autonomy in asceticism.

From all the observations above, Weber concludes that Baptist Sects did not give any remarkably new contribution to the development of the idea of calling, and so are to be ignored at large in the following stages of his study. But we can not forget the moment of conscience which Baptist Sects added to Calvinism and brought into the cool and formal legality of the Calvinistic mind some virtues of warmth as seen in B. Franklin.

Keywords: Bibliocracy,

God's blessing in manifestation,

From asceticism out of the world to that inside the world,

Conscience and Virtues to the formal legality of Calvinism

聖書至上主義,

啓示における神の恩寵

現世外禁欲から現世内禁欲へ

良心とカルヴィニズムの形式的合法性への美徳の付加

はじめに

第一章 問題

1. 宗派と社会階層分化

1-1. プロテスタントと近代企業の担い手との関連

— 職業統計にみる一現象 —

1-2. プロテスタントと近代企業の担い手との関連の原因

1-2-1. 歴史的経済的現象としての富裕

1-2-2. 経済的伝統主義の払拭

1-2-3. 近代教育志向

1-2-4. 近代企業志向

1-2-5. 経済的合理主義

1-2-6. 「現世性」

1-2-7. 「非現世性」

(以上, 第81巻第1号, 2001年6月)

2. 資本主義の精神

2-1. 歴史的観念形成の特質

2-2. ベンジャミン・フランクリンにみる「資本主義の精神」

2-2-1. フランクリンの文書

2-2-2. フランクリンにみる「資本主義の精神」

— 倫理的実践原理 —

2-2-3. フランクリンにみる「資本主義の精神」

— 天職に対する義務の観念 —

(以上, 第81巻第2号, 2001年9月)

2-3. 「天職に対する義務」の観念と近代資本主義

— その因果関係 —

2-4. 「資本主義の精神」と「前資本主義の精神」

2-5. 「前資本主義の精神」と「伝統主義の精神」

2-6. 精神と経済的行為

— 前資本主義と近代資本主義との特質 —

2-7. 労働者における伝統主義の精神と資本主義の精神

2-7-1. 労働者における伝統主義の精神

2-7-2. 「天職」の信念と宗教教育

(以上, 第81巻第3号, 2001年12月)

2-8. 企業者における伝統主義の精神と資本主義の精神

2-8-1. 資本主義企業と資本主義の精神

— その適合関係 —

2-8-2. 伝統主義の精神に対する資本主義の精神の闘争

2-8-3. 資本主義の精神と宗教的思惟

(以上, 第81巻第4号, 2002年3月)

3. ルターの天職観念

— 研究の課題 —

3-1. ルターにおける天職観念の形成

3-1-1. ルターの聖書翻訳と天職観念

3-1-2. ルターにおける天職観念の形成過程

3-2. ルターの天職観念における伝統主義の精神

3-2-1. ルターにおける伝統主義の精神

3-2-2. 聖書における伝統主義の精神

3-2-3. ルターの摂理信仰と天職観念

3-2-4. ドイツ神秘主義に対するルター派の退歩

3-3. ルター主義とカルヴィニズム

3-4. 課題の設定

— カルヴィニズムにおける宗教生活と現世行動 —

3-5. 課題の考察における諸留意点

(以上, 第82巻第1号, 2002年6月)

第二章 禁欲的プロテスタンティズムの天職倫理

1. 現世内禁欲の宗教的諸基礎

1-1. 禁欲的プロテスタンティズムの四つの源泉

1-1-1. 四つの源泉の曖昧性

1-1-2. 四つの源泉の教義的考察の意義

1-2. カルヴィニズムにおける「恩寵による選び」

1-2-1. 本質的教義としての「恩寵による選び」

1-2-2. 「ウェストミンスター告白」における「恩寵による選び」

1-2-3. カルヴィニズムにおける「恩寵による選び」の生成と意味

1-2-4. 「恩寵による選び」と個人の内面的孤立化

1-2-5. 即事的隣人愛としての職業労働

— カルヴィニズムの天職観 —

(以上, 第82号第2号, 2002年9月)

1-2-6. 恩寵確信の手段としての職業労働

— カルヴィニズムの天職観 —

1-2-7. カルヴィニズムの宗教心と体系的方法としての現世の道徳的生活態度

1-2-8. カルヴィニズムの「恩寵による選び」の意義

(以上, 第82号第3号, 2002年12月)

1-3. 敬虔主義

1-3-1. 神との共存の感情と現世軽視

1-3-2. 「純良な」信徒の強固な現世内禁欲

1-3-3. ドイツの敬虔主義

1-3-3-1. シュペナー

— ルター主義へのカルヴィニ
ズムの禁欲の侵入と教義の
混乱 —

1-3-3-2. フランケ

— 「贖罪のための苦闘」による
恩寵と禁欲的生活態度 —

1-3-3-3. ツィンツェンドルフ

— 教義の著しい混乱 —

1-3-3-4. カルヴィニズムの不確かな混在

1-3-4. 敬虔主義の実践的帰結

(以上、長崎大学経済学部研究年報2003年
3月)

1-4. メソディズム

1-4-1. 感情的信仰心と方法的生活態度

— 大陸の敬虔主義のイギリス-アメリカ版 —

1-4-1-1. 生活態度の方法的体系化

1-4-1-2. 信仰心における感情的要因

1-4-2. 感情的信仰心と方法的生活態度の結合

1-4-2-1. 救いの絶対的確信と「完全性」
の意識1-4-2-2. 「完全性」の意識と方法的生活
態度

1-4-3. 恩寵の感情的確信とメソディズム信徒の分化

1-4-4. メソディズムと信仰復興

1-4-5. メソディズムの意義

— カルヴィニズムの一晩生果 —

1-5. 洗礼主義小教団

— カルヴィニズムと並ぶ独自の源泉 —

1-5-1. 神の啓示による再生

— 洗礼主義小教団の教義 —

1-5-2. 聖書の遵守と啓示の持続の重視

— 洗礼主義小教団の宗教心 —

1-5-3. 啓示の期待と善き行ない

1-5-4. 善き行ないと職業生活

1-6. 禁欲的プロテスタンティズムにおける現世内禁欲の宗教的基礎
づけ

(以上、本巻本号)

(注：以上の目次のうち、第一章1. の1-2. ～1-2-7. そして第二章の1-2-5. ～1-2-7. については、当初のものを書き直している。)

1-5. 洗礼主義小教団

— カルヴィニズムと並ぶ独自の源泉 —

禁欲的プロテスタンティズムの源泉としてヴェーバーが第四にとりあげるものは、洗礼主義運動から生成した諸々の小教団である。

ヴェーバーによれば、これら小教団は、禁欲的プロテスタンティズムの四つの源泉のなかで、敬虔主義ともメソディズムとも異なっている。それは、カルヴィニズムと並ぶ独自の存在なのである。このことを、ヴェーバーは、以下のように説明する。

かれは、まず、洗礼主義運動から生成した諸々の小教団との比較という観点から、カルヴィニズムと対比して、敬虔主義とメソディズムとを、総じて、以下のように消極的に特質づける。

かれはいう。

「ヨーロッパ大陸の敬虔主義とアングロ・サクソン諸国のメソディズムは、その思惟の内容についてみても、また、その歴史的発展についてみても、副次的な現象である」(S. 150.)

われわれがすでに見てきたように、ヴェーバーによれば、敬虔主義とメソディズムとは、これらの教義をカルヴィニズムの教義との関係においてみると、この後者の教義の壮大な論理性を著しく弱体化したものであった。しかも、このような弱体化は、ヴェーバーによれば、教義においてのみ認められうるわけではない。それは、ヴェーバーにとって重要な禁欲倫理ないし禁欲的生活態度についても認められうる。かれによれば、敬虔主義とメソディズムとは、カルヴィニズムないし清教主義の一貫した禁欲的生活態度と比べるとき、これを弱体化したものなのである。

このことを、ヴェーバーは、上記引用文に注記して、つぎのようにいう。

「そして、それら（＝ヨーロッパ大陸の敬虔主義とアングロ・サクソン諸国のメソディズム — 笠原）は、清教主義の一貫した禁欲倫理を弱体化したもの（Abschwächungen）に他ならない。」(A. 150, fußnote 3.)

ヴェーバーによれば、これら敬虔主義とメソディズムとは異なり、洗礼主義および洗礼主義的小教団は、カルヴィニズムに対して独自の地位を占めている。

ヴェーバーはいう。

「これに対して、洗礼主義 (das T ä u f e r t u m), および16世紀と17世紀において洗礼主義から直接に生まれまたは洗礼主義の宗教的思惟形態を取り入れることによって生まれた諸々の小教団, すなわちバプティズム信徒の諸々の小教団 (Sekten der B a p t i s t e n), メンノー主義信徒の諸々の小教団 (Sekten der M e n n o n i t e n), そしてとりわけクエイカー主義信徒の諸々の小教団 (Sekten der Q u ä k e r) は、カルヴィニズムと並ぶプロテスタンティズムの禁欲の第二の独自の担い手であった。これらの小教団において、われわれは、その倫理が改革主義の教説とは原理的に異質な基礎をもつ諸々の宗教的共同体 (religiöse Gemeinschaften) に出会うことになる。」 (SS. 150~152.)

このように、ヴェーバーによれば、洗礼主義と洗礼主義的な諸々の小教団は、カルヴィニズムと並ぶプロテスタンティズムの禁欲的生活態度という思惟の担い手であった。しかも、洗礼主義と洗礼主義的な諸々の小教団は、のちに述べられるように、カルヴィニズムの教義とは原理的に異なる教義によってその禁欲倫理ないし禁欲的生活態度という思惟を基礎づけているのであり、この点において、禁欲的プロテスタンティズムの一つの独自の源泉、カルヴィニズムと並ぶ源泉、なのである。

さて、ヴェーバーは、以下において、このような洗礼主義と洗礼主義的な諸々の小教団をとりあげようとするのであるが、かれがそこで論述しようとするものは、もはやいうまでもなく、洗礼主義と洗礼主義的な諸々の小教団の多様な側面のすべてではないし、その多くですらない。かれがそこで論述しようとするものは、ただ、かれの問題からみて重要な側面、これのみである。この側面が、かれのいう「資本主義の精神」と関わりうる側面であるこ

とは、われわれがとくにいうまでもないことであろう。

このような理由から、かれは、洗礼主義と洗礼主義的な諸々の小教団との発展を、とりわけ「資本主義の精神」が発展した諸国、すなわち「先進資本主義諸国」におけるそれに重点を置いて考察しようとすることになる。

かれはいう。

「以下の素描は、もちろん、われわれにとってここで重要なことのみを際立たせて述べようとするものであり、この運動の多様性を把えうるようなものではない。われわれは、ここでも当然ながら、先進資本主義諸国 (die altkapitalistischen Ländern) におけるその発展に重点を置く。 —」 (S. 152.)

ここにわたくしが「先進資本主義 (的)」と訳した altkapitalistisch という言葉は、「前資本主義的 (prekapitalistisch)」に対する「近代資本主義的 (modern kapitalistisch)」に対応する言葉であると思われる。ここでは、「先進資本主義諸国」とは、近代資本主義が人類の歴史上はじめて生成し発展した諸国、すなわち西ヨーロッパ諸国およびのちに合衆国となった北アメリカを意味するものと解されうるのである。

1-5-1. 神の啓示による再生

— 洗礼主義小教団の教義 —

さて、ヴェーバーは、先進資本主義諸国において発展した限りでの洗礼主義および洗礼主義的な小教団について、まず、かれの観点からみてその歴史的、原理的に最も重要な思惟、すなわち禁欲倫理ないし禁欲的生活態度という思惟の基礎をなすその教義、を問題とする。

ヴェーバーによれば、洗礼主義および洗礼主義的小教団のこのような教義については、われわれは、これまでの論述のなかで、すでに、その^{●●●●}手掛かりともいうべきものに出逢っている。それは、「信じる者たちの教会」、すなわち「見ることのできない神の教会」を地上に引き下ろすことによって形成さ

れる「見ることのできる教会」、これである。

ヴェーバーはいう、

「これら小教団すべての歴史的そして原理的に最も重要な思惟が文化の発展にどれほどの影響を与えたかについては、もちろん、他の関連において考察される場合にのみ、まさに、明らかにされうる。だが、それはそれとして、その思惟の手掛かりともいうべきものには、われわれは、すでに出逢っている。『信じる者たちの教会 (believers' church)』が、これである。ここに『信じる者たちの教会』とは、あの宗教的共同体 (die religiöse Gemeinschaft), 改革主義教会の用語にいうあの『見ることのできる教会』 (die ›sichtbare Kirche‹) である。これは、もはや、来世への目的のための一種の家族世襲財産的施設 (Fideikommissstiftung), すなわち正しき者 (Gerechte) をも正しからざる者 (Ungerechte) をも含むことにならざるをえない一つの公共機関 (eine Anstalt) — それが、(カルヴィニズムのように) 神の御名を高めるためのものであらうと、または (カトリシズムおよびルター主義のように) 救いという賜物を人間に媒介するためのものであらうと — であるとは考えられなかった。それは、ただ、自ら信仰者となりかつまた再生者であることを自覚した一人一人の人間たちだけによって構成される一つの共同体としてのみ考えられた。換言するならば、それは一つの『教会 (Kirche)』としてではなく、一つの『小教団 (Sekte)』として考えられたのである。成育した者すなわちその内面において自ら信仰を獲得しこれを告白した個人にのみ洗礼を施すという、それ自体としては純粹に外面的な原則も、まさに、このことを象徴するものであるといわれるべきであらう。」(SS. 152～153.)

すなわち、ヴェーバーによれば、洗礼主義および洗礼主義的小教団(以下、われわれは、ヴェーバーののちの用語にしたがって、これらを洗礼主義小教団と総称しよう。)の信徒は、真のキリスト者である信徒をもそうでない信徒をもともに含むそれまでの教会、いわば社会的慣習としてキリスト教信徒

の家庭に生まれた者のすべてをその構成員として受け容れる公共施設としての教会、ではなく、真のキリスト者のみによって構成される共同体、すなわち自ら信仰を獲得し再生者であることを確信した一人一人の信徒のみによって自発的に形成される共同体、を考えていたのである。これを、ヴェーバーは、従来の公的施設としての教会から区別して「小教団 (Sekte)」と呼ぶのであり、ヴェーバーによれば、このような真のキリスト者のみの自発的共同体こそ、洗礼主義小教団の歴史的そして原理的に最も重要な思惟の手掛りをなすのである。そして、ヴェーバーによれば、この小教団における洗礼は、このように内面的な自発性によって共同体の構成員となった者に施される外面的原則に他ならなかった。

このように述べたヴェーバーは、つぎに、かれの観点に関わる限りで、洗礼主義小教団の原理的に重要な思惟に立ち向かう。そして、ここにヴェーバーがとりあげることになる原理的に重要な思惟とは、「神によって義とされ救われるのは何によってであるか」に関するその教義に他ならない。ヴェーバーによれば、洗礼主義小教団のこの義認に関する教義は、カトリシズムのこれに関する教義と異なることはもちろん、カルヴィニズムのこれに関する教義とも異なる。それは、これらとは別個のもの、すなわちある意味での原始キリスト教の教義の復活なのである。かれは、洗礼主義小教団のこの教義をつぎのように説明する。

かれはいう。

「さて、この (=洗礼主義小教団の — 笠原) 信仰による『義認』は、洗礼主義信徒たちにとっては、かれらがあらゆる宗教対話において執拗に繰り返してきたように、古プロテスタンティズムの正統的な教義体系 (Dogmatik) を支配していた思惟、すなわちキリストの功績を『裁きによって』帰属させる (forensische Zurechnung) という思惟とは、根本的に異なるものであった。それは、むしろ、キリストが為した救済という行ないを内面的に習得すること (innerliche Aneignung) を意味した。そし

て、この内面的習得は、個人的な啓示（*Offenbarung*）によって、すなわち個々人の内部における神の精神の作用によって、しかもこれのみによって、なされるのであった。啓示はあらゆる人々に提供されるものなのであり、これを得るためには、神の精神をじっと待ち受け、現世への罪深い執着によってその到来に逆らわなければ、それで十分なのであった。その結果、これとは異なる、教会の教説を知っているという意味での信仰、そしてまた神の恩寵を悔い改めによって獲得するという意味での信仰は、まったく意義をもたなくなり、これに代って、——もちろん著しく作り変えられたものとしてではあるが——、原始キリスト教への精霊的-宗教的思惟（*pneumatisch-religiöser Gedanke*）が復活したのである。」（SS. 153～154.）

ヴェーバーは、さらに続けていう。

「例えばメンノー・シモンズ（*Menno Simons*）がその著書『原理書（*Fondamentboek*）』（1539年）においてはじめてその教説をほぼ体系化した小教団は、他の諸々の洗礼主義小教団と同様に、真に申し分のないキリスト教会そのもの、すなわち神によって目覚めさせられ召命された個人（*persönlich von Gott Erweckten und Berufenen*）だけから構成されていた原始キリスト教教団（*die Urgemeinde*）のようなものであろうとした。」（S. 154.）

すなわち、ヴェーバーによれば、洗礼主義小教団の教義は、神による裁定すなわち恩寵による選びという、古プロテスタンティズム（*der alte Protestantismus*）の正統的教義体系における支配的教義とも、そして、悔い改めによって恩寵が獲得されうるというカトリシズムの教義とも、異なるものであった。それは、原始キリスト教の精霊的な宗教的思惟の一つの復活ともいべきものであり、キリストがなした救済という行ないを内面的に習得しようとする思惟であった。ここにいう救済の内面的習得は、教説を知ることによってではなく、個々人に対する神の精神すなわち精霊の作用ないし啓示によってなされるとされた。しかも、この啓示は、あらゆる人に与えられう

るものなのであり、これを得るためには、現世の罪深い執着を捨てて、その到来に逆らわなければ、それで十分だとされたのである。

要するに、神の啓示が、そしてこれのみが、信徒をして真のキリスト者すなわち再生者とするのであり、しかも神の啓示は、現世への罪深い執着によってこれを妨げなければ、すべての信徒のうちに到来するという思惟、これこそが、まさに洗礼主義小教団に独自の、義認をもたらす信仰についての教義なのである。

もっとも、この場合、洗礼主義小教団において、神の啓示がすべての信徒のうちに到来するといわれるとき、われわれは、このことが、すべての信徒が必ず神の啓示を受けて救われることを意味するわけではなく、また、すべての信徒が原則として救われることを意味するわけでもないことに注意しておかなければならない。

このことについては、われわれは、つぎの1-5-2.の終わりの部分でも述べることになるのであるが、われわれは、すべての信徒が原則として救われるわけではないとされるその理由を、ここでは、すべての信徒が現世への罪深い執着を捨てることが必ずしもできないことに、ひとまずは求めることができるであろう。すでに1-5-1.の最初の引用文の終りの箇所において、われわれは、ヴェーバーによって、洗礼主義小教団が「成育した者」にのみ洗礼を施すことを知らされているのであるが、このことは、洗礼主義小教団においては、神の啓示は、現世への罪深い執着を捨て使徒たちと同じ生活をしようと努力する信徒が、この努力の過程において「成育した」ときに、はじめて与えられると考えられていること、したがって、「成育した」わけではない信徒には洗礼が施されず、もしかしたら、「成育」することなく一生を終える信徒が少なからず存在するとさえ考えられていたこと、を意味するものと、われわれにはみえるのである。

1 - 5 - 2 聖書の遵守と啓示の持続の重視

— 洗礼主義小教団の宗教心 —

ヴェーバーによれば、洗礼主義小教団の以上のような教義に関わる宗教心には、二つのものがある。その一つは、厳格な聖書の遵守ないし聖書至上主義であり、もう一つは、啓示の持続の重視ないし啓示の期待である。この二つは、洗礼主義小教団の信徒の禁欲的生活態度と密接に関連するものであり、それゆえにヴェーバーにとっては重要なものなのである。

まず、聖書至上主義について、ヴェーバーはいう。

「(洗礼主義小教団の思惟においては — 笠原) 再生者が、しかも再生者だけが、キリストの同胞である。なぜなら、再生者は、キリストと同じく、直接に神の精神から作られた (von Gott geistig direct gezeugt) ものだからである。このような考えから、最初の洗礼主義信徒の共同体には、初期キリスト教信徒の世代の生活を模範とするという意味での極めて厳格な聖書至上主義 (Bibliokratie) と結びついて、『現世』すなわち世俗の人々との必ずしも必要ではない交流のすべてを厳しく避けようとする考えが生まれてきた。そして、現世回避というこの原則 (dieser Grundsatz der Weltmeidung) は、古い精神が生き続けている限り、けっして消え去ることはないのである。」 (S. 154.)

すなわち、ヴェーバーによれば、洗礼主義小教団においては、再生者とは、キリストと同じく、「直接に神の精神から作られた者」を意味するのであり、このような再生者は、聖書のうちに、初期キリスト教信徒すなわち使徒として記されている。洗礼主義小教団の信徒たちは、このような再生者であろうとしたのであり、そこで、かれらは、聖書のうちに記されている初期キリスト教の使徒の生活を模範とし、世俗の人々との必ずしも必要ではない交流については、このすべてを厳しく避けようとしたのである。これが、洗礼主義小教団の「聖書至上主義」の意味するものに他ならない。

この場合、われわれは、ここで洗礼主義小教団によって模範とされている

信徒の生活が、現世ないし世俗における生活ではなく、これから区別される生活であること、このような生活を模範とする洗礼主義小教団の宗教心が、現世の生活から遠ざかろうとする傾向を有していることに、とくに注意しておかなければならない。この点において、われわれは、ここにいわれる洗礼主義小教団の宗教心が、現世の生活そのものに向き合おうとしたカルヴィニズムの宗教心とは、異なるものであることを確認しておかなければならないのである。

ところで、ヴェーバーは、洗礼主義小教団の以上のような宗教心が、洗礼主義をその初期において支配していたものであることを述べる。そして、洗礼主義小教団においては、このような宗教心が動機となって、「被造物の神格化」が否定されたことを述べる。

かれはいう。

「洗礼主義小教団 (die täuferischen Sekten) は、これをその初期において支配していたこのような (= 聖書至上主義および現世回避という — 笠原) 諸動機から、『被造物の神格化 (Kreaturvergötterung)』をいかなるものであれ無条件に排斥するというあの原理を得て、これを受け継ぐことになった。なぜなら、(上記諸動機からみて — 笠原)『被造物の神格化』は、神にのみ帰せられるべき畏敬の念を貶めるものと思われたからである。洗礼主義小教団が受け継ぐことになったこの原理については、われわれは — その理由づけは少々異なるものの — カルヴィニズムについて述べたところですでに明らかにしたのであるが、これからもそれが基本的に重要であることを繰り返して明らかにすることになるであろう。」(S. 154.)

このように、ヴェーバーによれば、洗礼主義小教団においては、カルヴィニズムとは異なる理由から、しかもカルヴィニズムと同じく、「被造物の神格化」が厳しく拒否されたのである。そして、また、このような考えから、そこでは、カルヴィニズムにおけると同じく、現世のあらゆる享樂が捨てられることになった。

ヴェーバーによれば、以上に述べられたような洗礼主義小教団の宗教心にもとづく生活態度、「聖書的生活態度」は、初期の洗礼主義小教団信徒においては、この思惟において徹底していただけてはいない。それは、多くの場合、その実践においても徹底していた。

「スイス-上部ドイツの初期の洗礼主義世代が考えた聖書的生活態度は、聖フランチェスコ (Franz) がもともと考えたものと同じように、徹底的なものであった。すなわち、それは、現世のあらゆる享樂をきっぱりと捨て去り、使徒を模範とする生活を厳格に守ることを意味したのである。そして実際、その初期の代表者の多くの者の生活は、聖アエギディウス (Aegidius) のそれを思い起こさせるものだったのである。」(S. 155.)

ところで、以上のような聖書至上主義ともいわれるべき宗教心も、洗礼主義小教団信徒の宗教心のすべてであったわけではない。ヴェーバーは、つぎに、洗礼主義小教団信徒の宗教心として、啓示の持続の重視ないし啓示の期待を述べ、これによって聖書至上主義が制約されることを説明する。

かれはいう。

「しかし、この著しく厳格な聖書遵守 (Bibelobservanz) も、精霊的性格 (pneumatischer Charakter) をもつ宗教心に対しては、必ずしも確固としたものではなかった。神が予言者と使徒とに啓示し給うたこと (= 聖書に書かれていること — 笠原) は、神が啓示され得給い、また啓示しようとしてされ給うたことのすべてではなかった。反対に、聖書に書かれている言葉ではなく、信徒の日々の生活のなかで作用し、これを聴こうとする個々人に直接に語りかける、神聖な精神の力としての言葉 (= 啓示 — 笠原) が、持続していること、これこそが、 — すでにシュヴェンクフェルト (Schwenckfeld) がルターに反対して、また、後にはフォックスが長老主義信徒に反対して述べたように — 原始キリスト教教団の証言によれば、真の教会の唯一の徴候であった。啓示の持続というこの思惟から、あの周知の、のちにクエイカー主義信徒によって一貫した形に発展させられた、究極的には理性と良心とに、

(神の — 笠原) 精神がひとの内面に存在する証拠としての決定的意義を認めるという教説が、生まれたのである。このことによって聖書の妥当性が除かれたわけではないが、しかし聖書の専制支配は除かれ、そして同時に、教会による救済についての教説の残りのすべてが、クエイカー主義においてはついに洗礼や聖餐までもが、根絶されることとなる、あの発展への道が拓かれることとなった。」(SS. 154~155.)

すなわち、ヴェーバーによれば、洗礼主義小教団における宗教心は、精霊的性格をこそ、その基本とするものであった。その教義において、信徒を再生者たらしめる唯一のものとされた神の啓示は、過去においてのみならず、現在においてもなされているものなのであり、したがって、過去における神の啓示を記した聖書の言葉は、神の啓示のすべてではなく、この一部であるにすぎない。神の精神ないし精霊は、初期キリスト教信徒としての使徒たちに啓示され聖書に書かれているだけでなく、今日に至るまで持続的に啓示されてきているのであり、したがって、聖書に書かれている言葉を重視するだけでなく、とりわけ、自らに対してなされる神の啓示を重視し、これを待ち続けること、これこそが、洗礼主義小教団における宗教心の中心的内容だったのである。

しかも、この場合、洗礼主義小教団においては、神の啓示は、信徒の理性、そしてとりわけその良心に現れるとされたのであり、それゆえに、洗礼主義小教団は、個々の信徒それぞれの良心を重視した。換言すれば、ここでは、救いは、個々の信徒自らのうちにある良心のうちに現れるとされたのであり、この意味における個々の信徒のいわば主体性が重視されたのである。そして、このような考えから、洗礼主義小教団においては、カルヴィニズムにおける他者による救済が、したがって教会によるさまざまな救済が、拒否されることになった。

洗礼主義小教団が教会による救済を拒否したことについて、ヴェーバーは、つぎのようにいう。

「洗礼主義諸宗派 (Denominationen) は、予定説の信奉者、なかでも極めて厳格なカルヴィニズム信徒と並んで、救いの手段としての聖礼典のすべての価値を完全に否定し、このようにして、宗教における『魔法からの』現世の『解放』を究極的になし遂げた。持続する啓示という『内面の光』のみが、そもそも聖書における神の啓示なるものをも真に理解させるのである。神のこの作用は、他方で、少なくともこの点について徹底した結論を出しているクエイカー主義の教説によれば、聖書に書かれている啓示をまったく知らなかった人々にも及びうるとされたのである。」(SS. 155.~156.)

洗礼主義小教団にとっては、このような啓示の持続こそ、ひとを真のキリスト者とするものであった。しかも、この場合、この啓示は、人間が生まれつき有している理性よりも、とりわけ良心のうちに、現れるのである。

そこで、ヴェーバーはいう。

「『教会の外に救いなし (extra ecclesiam nulla salus)』という命題は、(神の — 笠原) 精神の光を受けた人々のこの見えざる教会についてののみ妥当した。内面における光 (= 良心 — 笠原) がなければ、生まれたままの人間は、たとえ生まれつき有している理性によって導かれる場合でさえ、純粹に被造物としての存在であり、神から遠い存在であること、このことを、洗礼主義信徒は、クエイカー主義者もまた、おそらくカルヴィニズムにおいて感じ取られた以上に、はっきりと感じ取っていた。」(SS. 156~157.)

このようにして、われわれは、洗礼主義小教団が、カルヴィニズムと同じく、しかもカルヴィニズムとは異なる理由によって、現世の魔法からの解放をなし遂げたことを知ることができるのである。

ところで、この場合、ヴェーバーによれば、洗礼主義小教団は、その教義において、カルヴィニズムによく似た思惟を有していることが注意されなければならない。それは、神による再生という恩寵が、獲得され得ると同時にまた失われうるものであるとは、考えられていないことである。このことは、とりわけ非禁欲的プロテスタンティズムとしてのルター主義、そして禁欲的

プロテスタンティズムのなかでルター主義の影響を受けたもの、との対比において、われわれがとくに注意しておくべきことである。

ヴェーバーはいう。

「他方において、(神の — 笠原) 精神は、われわれがこれを忍耐強く待ち、内面においてこれに自らを捧げるとき、再生をもたらすのであるが、この再生は、神の作用であるがゆえに、ひとをして罪の力を完全に克服した状態に到達させることができるのであり、この結果、この状態からの後戻り、ましてや恩寵を与えられている状態の喪失は、事実上不可能になるのである。」(S. 157)

しかも、それだけではない。われわれは、さきに、洗礼主義小教団においては、再生は、現世への罪深い執着によって神の啓示を妨げなければ、すべての信徒のうちに到来する、という思惟が存在することをみたのであるが、このことは、すべての信徒が原則として救われることを意味するわけでは、けっしてない。なぜなら、われわれがすでに述べたように、すべての信徒が、神の啓示を与えられるほどに、現世への執着を捨てることができるとは限らないからである。

ヴェーバーはいう。

「もっとも、この場合、のちにメソディズムにおいてみられることとなったように、上記の状態は、原則として達成される、と考えられたわけではない。むしろ、個々人の完全性の程度は、その発展によるのだと考えられたのである。」(S. 157.)

このようにして、ヴェーバーによれば、洗礼主義小教団においては、メソディズムの場合と同じく、結局は、特定の信徒だけが再生者となる。そして、特定の信徒だけが再生者となるという点では、それは、カルヴィニズムと同じ思惟を有するのである。ただし、それは、いうまでもなく、神による予定というカルヴィニズムの思惟から、このような結論を導きだすものではない。それゆえに、洗礼主義小教団においては、カルヴィニズムの場合とは異なり、

少なくとも、再生の[○]可能性は、すべての信徒に与えられている、とわれわれにはここではみえるのである。

1-5-3. 啓示の期待と善き行ない

ヴェーバーによれば、洗礼主義小教団においては、神による救いは、神の精神の作用としての啓示によって各人に明らかにされると考えられた。この啓示は、とりわけ各人の良心のうちに現れるのであり、信徒は、現世への罪深い執着を捨て、使徒の生活を送るとき、その良心において神の啓示を聴くことができる、とされたのである。

このようなヴェーバーの説明において、われわれは、すでに、洗礼主義小教団において、信徒がどのような生活を送るべきだと考えられていたかを、理解することができる。それは、いうまでもなく、「現世への罪深い執着」から区別される「使徒の生活」これである。これは、また、「世俗の人々との必ずしも必要ではない交流のすべてを厳しく避けようとする」生活であるともいわれうるものである。この生活の原則は、ヴェーバーによって、端的に「現世回避の原則 (Grundsatz der Weltmeidung)」とも呼ばれていたことが想起されなければならない。それは、われわれには、「現世の生活から遠ざかろうとする傾向」を有する生活とみえたのである。

このような生活ないし行ない、すなわち「善き行ない」、について、われわれは、さらに、ヴェーバーの述べるところを尋ねなければならない。

ヴェーバーはいう。

「いずれにせよ、洗礼主義小教団は[○]すべて、その構成員たちの行為に非の打ちどころがないという意味で『[○]純粋な[○]』教団であろうとした。現世とその利害からの内面における訣別、かつまた、われわれの良心においてわれわれに語りかけ給う神の支配への無条件の服従、これのみが本当の再生の唯一紛れもない標識なのであり、したがって、これに相応しい行為が、至福のためには必要であるとされた。至福は功績によって獲得されるものではなく、神

によって与えられる恩寵なのであるが、しかし、自らの良心に従って生きる者だけが、自らを再生者とみなしても良い、とされたのである。『良き行ない』は、この意味において『不可欠の条件 (causa sine qua non)』なのであった。」(S. 157.)

すなわち、洗礼主義小教団においては、至福は信徒の功績によって獲得されるものではなく、神の恩寵によって与えられるものであり、それゆえに、ひとは善き行ないを積み重ねることによって必ず救われるというわけではない。しかしながら、神の恩寵によって救われ、その良心において神の啓示を聴く真の再生者は、少なくとも、神の支配への絶対的服従をなし、したがって、これに相応しい行為すなわち良心に従う生き方ないし善き行ないをなす者である。この意味において、善き行ないは、再生者であることの不可欠の条件なのであり、それゆえに、洗礼主義小教団は、その構成員の行為が善き行ないである点において非の打ちどころのないものであることを求めた、とヴェーバーはいうのである。

この場合、われわれは、ここにいわれる善き行ないが、これまですでに何度も述べられたように、使徒たちの行ないを範とするものであり、現世の罪深い行ないから区別されるもの、とされていたことに注意しなければならない。それは、ここでは、「現世とその利害からの内面における訣別」として表現されているのである。これが、禁欲ないし禁欲倫理を特徴づけることはいうまでもないのであるが、この禁欲倫理ないし禁欲的生活態度は「現世回避の原則」に従うものであるがゆえに、われわれは、ここで、それが世俗における行為としての職業に対して否定的なニュアンスを有しているのではないかとの疑問を拭い去ることができない。洗礼主義小教団においては、職業生活を離れ、これと異なるところにおいて善き行ないが求められていたのではないか、われわれは、心の中に、このような考えが浮かんでくることを妨げることができないのである。

ところで、ヴェーバーによれば、洗礼主義小教団における善き行ないにつ

いてのかれのここでの論述は、かれがバークレイのうちに見出したものである。そして、われわれがここで注意しなければならないのは、ヴェーバーが、洗礼主義小教団における善き行ないについての以上のような思惟のうちに、カルヴィニズムの影響を見出していること、これである。

かれはいう。

「以上の論述は、バークレイ (Barclay) に拠るのであるが、かれのこの一連の思惟が改革主義の教説と實際上同じあり、さらにまた、それがまさにカルヴィニズムの禁欲の影響を受けて発展してきたことは、明らかであろう。カルヴィニズムの禁欲は、イギリスおよびネーデルランドの洗礼主義諸小教団に先立って存在していたし、カルヴィニズムの禁欲を真面目に内面において習得するよう説くことが、G. フォックス (G. Fox) の初期の伝道活動のすべてだったのである。」(S. 157.)

このように、ヴェーバーは、その教義、そして、われわれが1-5-2. でとりあげたその宗教心を別として、少なくとも禁欲ないし禁欲倫理という生活態度が救いの標識として有する意義に関する限り、洗礼主義小教団は、カルヴィニズムの影響を受け、カルヴィニズムと同様の思惟を展開することとなった、というのである。

たしかに、われわれは、ここ(1-5-3.)での最初の引用文において、洗礼主義小教団においては、「至福は功績によって獲得されるものではなく、神によって与えられる恩寵である」とされていること、しかしながら、再生者は「神の支配への無条件の服従」とをなす者であり、これのみが「本当の再生の唯一紛れもない標識」なのであり、それゆえに、「これに相応しい行為」すなわち「善き行ない」は、至福の「不可欠の条件」とであるとされることが、これらのことが述べられているのを見ると、この点に関する限り、禁欲倫理という生活態度の宗教的意義について、洗礼主義小教団がカルヴィニズムと同様の思惟を展開しているというヴェーバーの論述を理解することができる。しかし、それにもかかわらず、われわれは、洗礼主義小教団におい

ては、カルヴィニズムにおけると異なり、禁欲倫理が現世の行為としての職業とは別個のところで考えられていたのではないか、という疑念を、いまだに捨て去ることができないのである。

ところで、ヴェーバーによれば、洗礼主義小教団は、予定説をとらなかったために、当然ながら、禁欲倫理ないし禁欲的生活態度を予定説によって基礎づけることはできなかった。洗礼主義小教団は、予定説に代るその教義、すなわち神の啓示による救いの教義によって、禁欲倫理を基礎づけなければならなかったのである。そして、この教義による禁欲倫理の基礎づけのために用いられた思惟ないし宗教心こそ、啓示を「待ち続ける」という思惟ないし期待という思惟、これであった。このことを、ヴェーバーは、以下のように説明する。

かれはいう。

「ところで、心理学的にみれば、 — 予定説が放棄されたために — ，洗礼主義の道徳に特殊な方法的性格は、とりわけ、(神の — 笠原) 精神の作用を『待ち続ける (H a r r e n)』という思惟にもとづいていた。この思惟は、今日においてもなおクエーカー主義の『集会 (meeting)』の特徴であるし、パークレイの見事な分析によれば、このように黙して待ち続けることの目的は『自然なままの人間の衝動的で不合理なもの、熱情や主観性、を克服することにあるのであり、神は深い静けさの状態にある魂のなかでのみ語りかけられるものであるがゆえに、ひとは沈黙によって魂のこのような状態を作り出さなければならないのである。』」(S. 158.)

すなわち、洗礼主義小教団においては、神は「自然なままの人間」の衝動的で不合理な熱情や主観性に語りかけられることはなく、これらを克服して得られる深い静けさの状態にある魂にのみ語りかけられるのであり、それゆえに、ひとは沈黙し、このことによって、その魂を深い静けさの状態に置き、神の啓示を待ち続けなければならないのである。

ヴェーバーによれば、神の啓示を待ち続ける者のなかには、このように沈

黙し、その魂を深い静けさの状態に置くのではなく、逆に、その魂を熱狂のうちに置くものもあった。しかし、洗礼主義が現世の職業生活を営む人々のうちに浸透していくにつれて、これらの人々は、神は深い静けさの状態にある魂に語りかけ給うという思惟を受け入れることとなった。そして、かれらは、自らの行為をなすに際しては、これをその良心に照らして為し、また自らの行為を冷静に審査するようになったのである。

このことを、ヴェーバーは、つぎのようにいう。

「もちろん、このように『待ち続ける』ことによって、ヒステリー状態や予言、そして、終末への期待が存在する限り、事情によっては熱狂的な至福千年説（Chiliasmus）の勃発さえもが生じることとなりえた。このようなことは、これに似た基礎づけのやり方をもつ信仰心のすべてについて生じうることなのであり、ミュンスターにおいて根絶されてしまった一派の場合には、事実そうだったのである。しかし、正常な現世の職業生活のなかに洗礼主義が流れ込むとともに、神は被造物たる人間が沈黙する場合にのみ語りかけ給うという思惟によって、明らかに、人々は行為を静かに審査（Erwägung）し、行為をなすに際しては、これを注意深く自らの良心に照らして為すようになったのである。実際、この静かで冷静で優れて良心的な性格は、後期洗礼主義諸教団、とりわけクエイカー主義教団によって習得されたのである。」（S. 158.）

上記引用文に関して、われわれは、ヴェーバーが、洗礼主義小教団の発展について、われわれには決定的とも思われる変化を述べていることに注意しなければならない。この変化とは、かれが、「正常な職業生活のなかに洗礼主義が流れ込む」といういい方のうちに表しているものである。

われわれは、これまで、洗礼主義小教団において模範とされた生活が、現世における職業生活とは別個のものであるようにみえることを、度々述べてきた。そして、われわれは、この現世における職業生活とは別個のものとして理解されうる生活、使徒の生活が、初期の洗礼主義信徒によって守られよ

うとしたものであることを述べてきた。

だが、ヴェーバーの上記引用文における文言からみる限り、われわれは、洗礼主義が、使徒の生活を実践しようとした初期の信徒から、現世の職業生活を営む信徒に伝播し、この後者によって担われて行ったのだ、と考えなければならないであろう。そして、この後者の信徒については、洗礼主義小教団は、もはや、「現世回避の原則」を、その生活において実践するよう要求することはできなかったのではないか — われわれには、このように思われるのである。

それでは、「正常な現世の職業生活のなかに洗礼主義が流れ込」んだとき、洗礼主義は、このような生活を営む信徒たちに、どのような生活原則ないし生活態度を要求することになり、また、これら信徒たちは、どのような生活態度をとろうとすることになったのであろうか。これら信徒たちにも、沈黙のうちに神の啓示を待ち受けることが要求され、また、これら信徒たちが、この要求によく応えて、その「行為を静かに審査し、行為をなすに際しては、これを注意深く、自らの良心に照らして為すようになった」ことは、ヴェーバーによって、すでに述べられた。われわれは、ここに、カルヴィニズム信徒にみられたと同じ生活態度をみることができであろう。だが、われわれは、さらに、ヴェーバーのいうところを聴かなければならない。

1-5-4. 善き行ないと職業生活

ヴェーバーは、洗礼主義小教団の「正常な現世の職業生活」を営む信徒たちの禁欲的生活態度についていう。

「魔法からの現世の根本的解放は、内面的に、現世内部において禁欲をなすこと以外の途を許さなかった。(そして、 — 笠原) 政治権力やその行使に参与しようとは思わなかった諸教団 (= 諸々の洗礼主義小教団 — 笠原) にとっては、魔法からの現世の根本的解放は、また外面的にも、この禁欲的美徳を、(政治活動から区別される経済活動としての — 笠原) 職業労働に

向けさせることとなった。」(S. 158.)

このように、ヴェーバーによれば、洗礼主義小教団においては、魔法からの現世の解放は、その、「正常な職業生活」を営んでいる信徒に対しては、まさにこの職業生活そのものにおける禁欲的生活態度の実践を要請することとなった。洗礼主義小教団においては、また、政治に携わることが忌避されたのであり、このことは、いわば政治生活を含む広義の現世の生活のなかで、とくに経済生活としての職業生活に、禁欲的生活態度の実践が向けられることを促したのである。

だが、われわれがこれまで述べてきたように、洗礼主義小教団は、その初期においては、その宗教心において、職業生活とは別個の使徒の生活をその模範とするものであった。それは、現世を回避し、現世とは別個のところでの禁欲倫理とその実践を要求するものと思われたのである。それでは、洗礼主義小教団のこのような思惟ないしその宗教心の方向は、現世の内部における禁欲倫理を要求する方向へと、一体どのようにして変わったのであろうか。

ヴェーバーはいう。

「たしかに最も初期の洗礼主義運動の指導者たちは、一切の考慮なしに現世に根元的に背を向けようとしていたのであるが、しかし、当然ながら、すでに最初の洗礼主義世代になると、厳格に使徒のような生活態度を守ることには、無条件にすべての信徒に再生の証拠としてどうしても必要なものとされたわけではなかった。この世代には、すでに裕福な市民が含まれていたものであり、そこで、すでに、徹底して現世内部の職業的美徳と私有財産秩序との土台の上に立っていたメンノー以前に、洗礼主義信徒の真面目な道徳的厳格さは、改革主義の倫理によって開拓されたこの土壌の方へと、実際のところ向ったのである。なぜなら、現世外部の修道土的形態への禁欲の発展は、ルター以来、非聖書的で行為を神聖視するものだとして排斥されていたのであり、この点では、洗礼主義信徒も、これに従ったからである。」(SS. 158～159.)

すなわち、ヴェーバーによれば、最も初期の洗礼主義小教団の指導者たちは、たしかに、現世に完全に背を向け、現世の生活から離れた生活を営むことを理想としていた。しかし、このような考え方は、すぐに変わらざるをえなかった。なぜなら、洗礼主義小教団は、間もなく、裕福な市民をその信徒のうちに含むようになったのであり、このような信徒をも再生者として認めようとする限り、洗礼主義小教団は、このような信徒に対して、現世の生活を離れた生活のみを営むよう要求することはできなくなったからである。

しかも、洗礼主義小教団にとっては、カルヴィニズムによって職業生活における禁欲倫理という土壌がすでに開拓され準備されていた。

そして、そもそも、プロテスタンテイズムにおいては、現世に背を向け、現世の外部の修道院における修道士的形態へとその禁欲倫理を展開していくことは、すでにルター以来、非聖書的であり、行為それ自体を神聖化するものだとして排斥されていたのである。

洗礼主義小教団自体にとっても行為そのものはそれ自体として神聖なものではなく、そこでは、神こそが、そして聖書に記され現在にまで続いている神の啓示こそが、神聖なのであった。そして、すでに述べられたように、行為は、啓示が現れうる被造物としての人間の良心にしたがってなされるべきものであった。ただし、洗礼主義小教団においては、善き行為は、これが行為者の良心を示し、したがって啓示の可能性を示すものであるがゆえに、ひとが再生者であることの「不可欠の条件」とされたのである。

このようにして、洗礼主義小教団は、結局、その思惟を変化させ、現世の職業生活における禁欲倫理という、カルヴィニズムによって用意されていた土壌の上を歩むことになったのである。

もっとも、ヴェーバーによれば、諸々の洗礼主義小教団のうちには、カルヴィニズムとは異なる行き方をとるものが存在した。すなわち、諸々の洗礼主義小教団のなかには、現世の職業生活において禁欲倫理を体系的に実践し方法的な道德生活を営むものとは異なるものが存在したのである。

ヴェーバーはいう。

「もっとも、 — ここで扱うつもりのない初期の半ば共産主義的な諸教団を別として、 — ある洗礼主義小教団 — いわゆる『浸礼主義者たち (Tunker)』 (dempelaers, dunckards) — は、今日に至るまで、教育と露命をつなぐのに不可欠なもの以上の所有とを、かたくなに排斥してきただけではなく、例えばバークレイでさえ、職業における誠実さ (die Berufstreue) を、カルヴィニズム風にまたはルター主義風にさえ解することなく、むしろトマス主義風に解していた。すなわち、かれらは、職業における誠実さを信徒が現世に関わらざるをえないことから生じる『自然理法的に (naturali ratione)』不可避の帰結だ、と解していたのである。」 (S. 159.)

ヴェーバーによれば、このような見解をもつ小教団は、カルヴィニズムと比べるとき、洗礼主義小教団における職業生活の方法的展開を弱めるものであった。

ヴェーバーはいう。

「このような見解には、シュペナーやドイツ敬虔主義信徒の幾多の文言にみられるものと同じように、カルヴィニズムの天職観念を弱めるものが存在したのである。…」 (S. 159.)

しかしながら、ヴェーバーによれば、洗礼主義小教団には、他方で、職業生活における禁欲倫理の展開を強化する諸要因が存在した。その第一は、官職への就任の拒否である。

ヴェーバーはいう。

「…だが、他方において、洗礼主義小教団においては、経済的職業への関心を基本的に強めるさまざまな要因が存在していた。その一つは、官職への就任の拒否であった。これは、もともとは現世を避けることから生じる宗教的義務として理解されていたのであるが、現世回避の原則が放棄されてしまったあとにおいても、少なくともメンノー主義信徒とクエイカー主義信徒については、れらが兵器の使用と宣誓とを厳しく拒否しその結果として公職に

就く資格を失ったために、實際上続いたのである。」(SS. 159～160.)

経済的職業生活における禁欲倫理の展開を強化した第二の要因は、第一の要因と部分的に関連する。それは、貴族主義的な生活様式に対する洗礼主義小教団の敵意である。われわれは、洗礼主義小教団が被造物讃美を排し、現世の享樂を否定するものであったことをすでに知っている。貴族主義的な生活様式に対する敵意は、一つには、洗礼主義小教団のこのような思惟によるということが出来るだろう。ヴェーバーも、また、このことを認めているのである。だが、それだけではない。ヴェーバーによれば、貴族主義的な生活様式に対する敵意は、また、第一の要因において示された官職への就任の拒否にも由来する。

ヴェーバーはいう。

「上記要因と関連しつつ（経済的職業生活における禁欲倫理の展開を強化するよう — 笠原）作用したもう一つの要因は、洗礼主義諸宗派のすべてにおいてみられた、貴族主義的な生活様式に対する抜き難い敵意である。これは、一つには、カルヴィニズム信徒の場合と同様、被造物讃美（Kreaturverherrlichung）が禁止されたことの一つの結果であり、一つには、あの非政治的な、またはまさしく反政治的な、諸原則の帰結でもあった。このことによって、洗礼主義的な生活態度の非常に冷静で良心的な方法的体系（Methodik）は、非政治的職業生活へと信徒を押し進めることとなったのである。」(S. 160.)

このように、洗礼主義小教団は、政治の分野における活動を拒否したのであり、また、この活動としばしば結び付いている貴族主義的な生活様式を拒否した。そして、それは、このことによって、経済の分野における職業へと信徒を押しやり、ここで厳しい禁欲倫理を実践するよう信徒を促したのである。

しかも、この場合、ヴェーバーによれば、神の啓示が良心のうちに現れるという洗礼主義小教団の思惟は、職業生活における洗礼主義小教団信徒の態度に、ある特質を与えることになった。それは、洗礼主義小教団においては、

まさに良心こそが職業生活における審査の基準となり、このことから、「正直」が、そしてフランクリンの著作にみられる資本主義の倫理の原則のような禁欲の形態が、現われたことである。

ヴェーバーはいう。

「さて、この場合、洗礼主義の救済論が、個人への神の啓示としての良心による審査に著しい意義を与えたことは、職業生活における洗礼主義信徒の態度（Gebarung）に、ある特徴を与えることとなった。この特徴が資本主義の精神の重要な諸側面の展開にとって大きな意義をもったことについては、われわれは、のちに詳しく述べることになるであろう。その際にも、われわれは、ここでプロテスタンティズムの禁欲の政治的および社会的倫理の全体について詳論しておく必要のないかぎり、そのことを述べようと思う。そこでは、われわれは、—— 少なくともこのことだけは予め言っておきたいのだが ——，洗礼主義信徒たち、とくにクエイカー主義信徒にみられたあの現世内部における禁欲の特殊な形態が、すでに17世紀の人々の目からみても、『正直は最良の方策（honesty is the best policy）』と言い習わされ、また、すでに引用したフランクリンの著作においても古典的な表現を見出していた、資本主義『倫理』のあの重要な原則の具体的な形として実際に現れていたことを知ることになるであろう。」（S. 160.）

ヴェーバーによれば、洗礼主義小教団のこのような作用に比べるとき、カルヴィニズムの作用は、むしろ、営利という経済的エネルギーを解放したところに求められうる。

かれはいう。

「これに対して、われわれは、カルヴィニズムがむしろ営利という私経済的エネルギーを解放する方向に作用したと推測することになるであろう。なぜなら、その『聖徒たち』が形式的にはまったく合法的であった（Legalität）にもかかわらず、ゲーテの『行為する者はつねに良心を失うのであり、観察する者以外に良心を有する者はいないのだ』という命題が、カルヴィニズム

信徒にとっても、結局は、しばしば十分に当てはまったからである。」(SS. 160～161.)

ヴェーバーは、さらに、ここで注記して、つぎのようにいう。

「例えば、Th. アダムズ (Th. Adams) は、市民的行為においては多数者と同じよう^{●●●●●}に行為するのが良く、宗教的行為においては最良者と同じようにするのが良い、といっている。(Works of the Pur. Div. p. 138) — この言葉は、われわれにとっては、もちろん、かれが考えていること以上のある意味を持っている。すなわち、そこに意味されているものは、清教主義信徒の正直 (Redlichkeit) とは形式^{●●●}的合法性 (formalistische Legalität) だということ、同様にまた、清教主義の過去をもつ諸国民がその国民的美徳^{●●●●●}だとして誇らしげに主張する『誠実 (Wahrhaftigkeit)』または『正しさ (uprightness)』なるものが、ドイツ人のいう『正直 (Ehrlichkeit)』に比べて、いささか特殊な差異^{●●●}を示すもの、すなわち形式的かつ思弁的に作り変えられたもの (formalistisch und reflexiv Umgemodeltes) であること。これである。…清教主義の倫理の形式主義 (Formalismus) は、清教主義が律法^{●●●}と結び付いたことから生じた、まさに適合的な結果なのである。」(S. 161. fußnote 1).)

すなわち、カルヴィニズムの「聖徒たち」は、たしかに、まったく合法的に経済活動を営んだのであるが、しかし、この合法性は、律法にもとづくものであり、形式的なものであって、各人の「良心」にもとづくものではなかった。それは、合法的である限り、各人の良心を無視するものでもありえたのである。

これに対して、洗礼主義小教団は、まさに、各人の良心を経済活動の審査における基準としたのである。

さて、ヴェーバーは、さらに、洗礼主義小教団が職業生活において禁欲倫理を強化することとなった第三の要因として、それが「教会」ではなく「小教団」であったことをあげる。かれによれば、洗礼主義小教団が、信徒に対

して規則をなす教会ではなく、信徒の自発的な意志にもとづく小教団として形成されたことが、この小教団において、職業生活における禁欲倫理が強力に展開されたことの一つの要因なのである。ヴェーバーは、このことを、かれがこれまでにとってきた論述の仕方と関連させて説明する。

かれはいう。

「洗礼主義諸小教団の現世内禁欲を強めることとなったもう一つの重要な要因についても、その意義を十分に詳論することは、他の関連においてのみ可能である。とはいえ、これについても、予め、いくつかのことを述べ、同時に、この論文においてわたくしが選んだ叙述のやり方について申し開きをしておくべきであろう。」(S. 161.)

「この論文においては、さし当って古プロテスタンティズム教会の客観的な社会的諸制度とこれらが倫理に与えた影響とから出発する行き方、とりわけ非常に重要な教会規則 (Kirchenzucht) から出発する行き方は、まさに意図的に取られておらず、個々人における禁欲的宗教心の主体的習得 (die subjektive Aneignung der asketischen Religiosität seitens der einzelnen) が生活態度にもたらした作用から出発する行き方がとられている。わたくしがこのような行き方をとった理由の一つは、問題のこの側面がこれまでほとんど考察されてこなかったことにある。だが、それだけではなく、教会規則が常に同じ方向へと作用したわけではけっしてないことも、また、その理由の一つである。個々人の生活に対する教会の警察的審査 (die kirchenpolizeiliche Kontrolle) は、これがカルヴィニズム的な国教主義の勢力範囲において宗教裁判とほとんど変わらないほどにまで丹念に行なわれた場合にみられるように、方法的に救いを確信しようとする禁欲的努力によってもたらされる個人の諸力のあの解放に対して、むしろ、まさにこれを抑圧する方向に作用しえたのであり、このことは、事情によっては、実際に起ったことなのである。」(S. 161.)

このように、ヴェーバーによれば、教会規則は、たしかに重要なものではあ

るが、しかし、それは、ときに、教会があたかも警察であるかのように信徒の生活を審査する事態を引き起こしたのであり、このような教会による警察的な審査は、これが極端になればなるほど、信徒の自発的な禁欲的生活を抑圧することになった。それは、信徒が救いの確信を求めて自らの意志によってその生活を方法的に倫理化しようとする行き方を妨げていたのである。思うに、教会規則は、このとき、むしろ、現世内部における禁欲倫理という生活態度とその実践とを強めるのではなく、逆に、これを弱めるよう作用することともなりえたであろう。われわれは、他からの強制とこれに対する服従ではなく、むしろ、強力な自発性こそ、プロテスタンティズムにおける現世内禁欲倫理という生活態度とその実践とを押し進めた要因であることを銘記しなければならないのである。

ヴェーバーは、さらにいう。

「国家による重商主義的規制は、たしかに諸産業を育成しえたのではあるが、しかし、それは、少なくとも単独では、資本主義の『精神』を育成することはできなかった。— それは、むしろ、これが警察的-権威的性格をもつ場合には、資本主義の『精神』をしばしばあからさまに弱めたのである。これとまさに同じように、禁欲に関わる教会の規制も、これがあまりにも警察的なものへと発展しすぎた場合には、同様の作用をもちえた。すなわち、この場合には、教会の規則は、特定の外面的（禁欲倫理的 — 笠原）行動を強制したのだが、しかし、事情によっては、方法的生活態度への主体的原動力（Antriebe）を弱めることになったのである。これらの点が論じられる場合には、国教主義教会の権威的道德警察の作用と、自由意志にもとづく服従を基礎として形成された諸々の小教団の道德警察の作用との間に、大きな違いがあることが、常に注意されなければならないのである。」(SS. 161~162.)

このようにして、ヴェーバーは、第三の要因について、つぎのように結論する。

「いずれにせよ、洗礼主義運動がその諸々の宗派のすべてにおいて、原則

として、『教会』ではなく『小教団』を生み出したことは、その禁欲を強化させることになった。このことは、[○]事実上[○]自発的に教団を形成せざるをえなかったカルヴィニズム教団、敬虔主義教団、メソディズム教団の場合にも、
— その強度に差はあるが — 生じたのである。」(S. 162.)

1-6. 禁欲的プロテスタンティズムにおける現世内禁欲の宗教的基礎づけ

以上、第二章の第1節「現世内禁欲の宗教的諸基礎」において、ヴェーバーは、何よりもカルヴィニズムが、そしてさらには洗礼主義小教団が、その教義によって、そしてその宗教心によって、プロテスタンティズムの天職観念ないし天職理念を基礎づけたことを明らかにした。この二つに比べるとき、禁欲的プロテスタンティズムの他の二つの源泉、すなわち敬虔主義とメソディズムとは、この点では、ただ、カルヴィニズムを弱体化させたものとしてみられえたのである。

もっともこの場合、洗礼主義小教団については、われわれは、これが、ヴェーバーによってカルヴィニズムと並ぶ禁欲的プロテスタンティズムの独自の源泉と呼ばれるものであったにもかかわらず、カルヴィニズムとの比較においては、天職観念の宗教的基礎づけにおいて、やはり、独自性に劣る、といわざるをえないであろう。われわれは、洗礼主義小教団が、[○]カル[○]ヴィ[○]ニ[○]ズ[○]ム[○]によって[○]影響[○]されて[○]その[○]現[○]世[○]内[○]禁[○]欲[○]を受け入れ、このためにその宗教心の重点を聖書至上主義から啓示の期待へと移したことを忘れてはならない。

われわれは、ここで、洗礼主義小教団がカルヴィニズムと並ぶ独自の源泉であることを述べた箇所において、ヴェーバー自身がすでにつきのように注記していることに注意しなければならない。

かれはいう。

「…以下の（洗礼主義小教団についての — 笠原）素描が短いのは、この論文において特別に詳論されるべき問題すなわち『市民的』[○]天[○]職[○]理念の宗教的諸基礎の発展にとって、洗礼主義小教団の倫理が著しく限られた意義しか

有していないという事情のためである。洗礼主義小教団の倫理は、『市民的』天職理念の発展に対して、真に新しいといえるようなものを付け加えたわけではなかった。」(SS. 151～152, fußnote 1.)

ただ、この場合、このようなヴェーバーの論述にもかかわらず、ヴェーバー自身によって、洗礼主義小教団が良心にもとづく美德という特質を天職観念に与えたとされていたことは、われわれが看過できないことである。

さて、ヴェーバーは、かれが以上第二章第1節において示した論述を、以下のように要約することになる。

かれはいう。

「さまざまな禁欲的宗教諸団体 (Religionsgemeinschaften) には個別的には著しい相異があり、また、われわれにとって決定的な観点に関わるものについてこれらが強調したものにも著しい相異があるけれども、われわれにとって決定的なこの観点に関わるものが、これら禁欲的宗教団体のいずれにも存在し作用していたことは、これまで示したとおりである。」(S. 162.)

ここに「われわれにとって決定的なこの観点に関わるもの」が「清教主義信徒の天職理念」ないし「現世内禁欲としての天職という理念」の「宗教的基礎づけ」に関わるものであることは、いうまでもない。

ヴェーバーは、このことを、つぎのようにいう。

「ところで、いま一度いうとすれば、われわれの研究にとって常に決定的であったのは、以下のことである。すなわち、どの宗派においても、宗教的に『恩寵を与えられている状態』という考え方が繰り返して主張されているのであるが、この『恩寵を与えられている状態』とは、まさに、極悪な被造物としての『現世』から人間を分離した状態 (地位 (status)) を意味した。そして、この状態に自らがあるということは、 — これが当該諸宗派によって教義上どのようにして得られると考えられようと — 何らかの魔法的-聖礼典的手段や告解による罪の赦しや、個々の信仰上の業績によって保証されうるとは考えられず、ただ、『自然な』人間の生活様式とは明白に異なる特

殊な性質をもつ行為における実証[○]によってのみ保証されうると考えられた。このような考えから、個々人は自らが恩寵を与えられている状態にあることをその生活態度において方法的に審査しようとする原動力[○]を有するようになり、このことによって自らの禁欲[○]をその生活態度において徹底的に押し進めることとなった。ところで、この禁欲的生活様式は、われわれがすでにみたとおり、まさに、全存在を神の意志に従って合理的に形成することを意味した。そして、この禁欲は、もはや、おまけとしての行い（opus supererogationis）ではなく、自らが至福を与えられていることを確信したいと思う者のすべてがなすべき課題（Leistung）だとされた。宗教的に必要とされ、『自然な』生活とは異なるものとされる聖徒たちのあの特別の生活は、— これが決定的な点なのであるが — もはや、現世の外部の修道院（Mönchsgemeinschaften）においてではなく、現世とこの秩序の内部において営まれることとなった。現世内部にありながら来世をめざしてなされる生活態度のこの合理化こそは、禁欲的プロテスタンティズムの天職観念の作用であった。 — 」（SS. 162～163.）

すなわち、ヴェーバーによれば、予定説によって生じた救いの確信とりわけ救いの実証という宗教心は、信徒に、自らが救われていることを、その生活態度とこの実践について方法的に審査しようとする意識をもたせる心理学的原動力となったのであり、このことによって、信徒の禁欲的生活態度ないし禁欲的生活様式、すなわち禁欲倫理を、徹底的に推進させることになった。ここに禁欲倫理とは、人間の全存在を神の意志に従って合理的に形成することを意味し、しかも、それは、救いの確信を得ようとするすべての信徒がなすべきこととされたのであるが、この禁欲倫理は、現世の職業が天職であり神の御名を高めるためのものであるとされることによって、修道院の内部においてではなく、まさに現世とこの秩序のただ中において、形成され実践されることになった。プロテスタンティズムの天職理念によって、職業労働は、現世にありながら来世をめざしてなされる生活態度の合理化すなわち現世内

禁欲の実践として理解されることになったのである。

ヴェーバーは、さらにいう。

「当初、現世を離れ孤独のなかに逃げ込むことから始ったキリスト教の禁欲は、これが現世を捨て修道院の内部において行われるようになったとき、すでに、現世を教会の支配下においていた。そして、この場合には、キリスト教の禁欲は、概していえば、現世の日常生活を、これが自然の無邪鬼な性格をもつままに放置していたのである。だが、いまや、キリスト教の禁欲は、生活のまっただ中に現れることとなった。それは、修道院とはきっぱりと縁を切り、これを後にして、まさに現世の日常生活を方法によって染め上げようとしはじめた。それは、現世の日常生活を、現世にありながらしかも現世によってでも現世のためにもない、合理的生活に作り変えようとしはじめたのである。この結果がどうなったか、われわれは、以下において、このことを示そうと思う。」(S. 163.)

このように、かれの論文の第二章の前半をなす第1節が、清教主義信徒の天職理念の宗教的基礎づけを考察するものであったことを述べたヴェーバーは、いまや、第二章の後半をなす第2節において、清教主義信徒の天職理念が営利生活に及ぼした作用を考察することになる。

かれはいう。

「これまで、われわれは、清教主義信徒の天職理念の宗教的基礎づけを、簡単ではあるが辿ろうとしてきた。これからは、われわれは、清教主義信徒の天職理念が営利生活に及ぼした作用を辿ることになる。」(S. 162.)

ここにいう清教主義信徒の天職理念は、もはやいうまでもなく、とりわけ、現世内禁欲の実践としての天職労働という思惟を意味する。この場合、現世内禁欲としての生活態度は、第二章第2節の標題においても、ヴェーバーによって簡単に「禁欲」と記されることになる。ヴェーバーは、つぎの第2節において、清教主義の天職理念すなわち現世内禁欲の実践としての天職労働というその思惟が営利生活に与えた影響、それがとりわけ営利の精神として

の近代資本主義の精神の生成に与えた影響を、明らかにしようとする。かれは、現世における人間の生活の全体を神の意志に従って合理的に形成することを意味するプロテスタンティズムの禁欲ないし現世内禁欲という生活態度が、資本主義的生活様式、とりわけ資本主義の精神に、どのように作用したのかを、明らかにしようとするのである。